平成30年度第２回神奈川県総合教育会議議事録

名　　　　称：平成30年度第２回神奈川県総合教育会議
開 催 日 時：平成30年11月６日（火曜日）　午前10時00分から11時00分まで
開 催 場 所：県庁　新庁舎５階　第５会議室
出　席　者：黒岩祐治知事、桐谷次郎教育委員会教育長、高橋勝教育委員会委員、河野真理子教育委員会委員、吉田勝明教育委員会委員、笠原陽子教育委員会委員、佐藤麻子教育委員会委員
次回開催予定日：平成31年度予定
問 合 せ 先：所属、担当者名　政策局政策部総合政策課政策調整グループ　村上、内海
電話番号　　　　(045)210-3056（直通）
ファックス番号　(045)210-8819

－－－

経過：

１　開会

中谷政策部長：開会にあたりまして、本会議を主催いたします黒岩知事からごあいさつを申し上げます。

黒岩知事：本日は大変お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

初めにこの教育委員会委員について、これまで多大なご尽力をいただきました、倉橋委員の任期満了につきまして、この度、佐藤麻子委員を新たにお迎えいたしました。どうぞよろしくお願いしたいと思います。

この新しい教育委員会のメンバーは、男女同数ということでありまして、非常に時代の流れに合っているかなというふうに思っているところであります。本日の総合教育会議、新しい体制で進めて参ります。どうぞよろしくお願いしたいと思います。

本日のテーマでありますけれども、子どもがスポーツに親しめる環境づくりについてということであります。

来年のラグビーワールドカップも１年を切りましたし、その次の年には東京オリンピック・パラリンピックを控えておりまして、この神奈川もメインの会場になります。

その中で、このトップアスリートの大きな大会は、これは素晴らしい催しであるのですが、これを機会に、できるだけ幅広く多くの県民の皆さんに、スポーツに親しんでいただく環境づくりを進めたいと考えています。その中で特に最近の子ども達の現状を見ますと、特に小学生女子のスポーツ実施率が非常に低いという調査のデータが出ております。

この小学生女子だけではなくて、子ども達のスポーツ環境がどうなっているのか、神奈川としては、真剣に目を向けなきゃいけない、そんな状況だったという認識がありますので、皆さんとともに、子ども達がスポーツに親しめるような環境づくりについて今日は議論したいと思いますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

２　議事

議題１　子どもがスポーツに親しめる環境づくりについて

中谷政策部長：ここからの議事進行は、知事にお願いをいたします。

黒岩知事：それでは、本日の議題、子どもがスポーツに親しめる環境づくりについて、まずは事務局から資料説明をいたします。

○　池田総合政策課長より資料について説明。

黒岩知事：最初のグラフを見ると少し愕然とする思いですけれど、全国から比べて本県は非常に基礎的な運動能力が低いという結果になっております。男女共同参画と言いながら、子ども達の世界で見ると、男子女子のこの運動の差というものが歴然としているということであります。こういった問題にどう取り組んでいくのか、どうお考えなのかということを委員の皆さんにお話をお伺いしていきたいと思います。それでは最初、笠原委員いかがでしょうか。

笠原委員：おはようございます。よろしくお願いいたします。私ごとで恐縮なんですが、私、新採用から数年、小学校で教鞭をとっておりました。私自身は体育はとても好きで、体育の時間を楽しみに子ども達と過ごしていた時期もあったんですが、自分が好きだから、子ども達に上手に教えられるかというと、これがなかなか難しくて。事前に練習したり準備をしたりして、子どもが、例えば跳び箱が飛べるようになる、鉄棒の逆上がりができるようになる、ということに取り組んでいたんですが、なかなか難しかったという思いが残っていました。その後、仕事での機会があって、当時の教育委員であられた具志堅先生に学校に行っていただいて、子ども達に指導していただく場面に、たまたま立ち合わせていただいたんです。そうしましたら最初、具志堅先生は何もされないでじっと見ていたんですね。子ども達は、若干緊張の面持ちで跳び箱を飛んでいたんですが、ふっと具志堅先生がその子どものそばに行って、こそこそと何かお話をされたんです。そしてその後、子どもが跳び箱を飛んだら、全然跳び方が違ったんです。それで、跳び終わった子どもに、具志堅先生からどんな話をされたんですかって聞いたら、こんなふうに手をつくといいよとか、踏切はこういうふうにするといいよということを言われた、そのとおりにやってみたと。そのとき私は自分の小学校時代のことが蘇ってきて、あ、そうなんだなって。コツを教えるというのは、ただ、ものの本に書いてあることを言えばいいということではなくて、自分自身がきちんとその運動をやっていて、その運動の特徴がわかっている人が教えることが大事なことなんだなというのをすごく実感したんです。それで、先ほどご説明にもあった、この子どもキラキラプロジェクトで指導主事に学校に行っていただいたり、運動に長けた方に行っていただいているってことがとても重要なことだなというふうに思います。確かに体力、運動の結果は芳しくはないんですけれども、ただ、潜在的に力を持っている子たちはいると思いますし、そこで誰に教えてもらったかってことによって、運動が好きになっていくという、そのきっかけってとても大事だなと思うので、こういった取組みが継続していくことは、すごく大事と思っていることが一つあります。県がこういう

取組みをするということが、結果的には市町村がそれを引き継ぎながら独自に広めていって、少しずつですけれど、裾野が広がっていくんだろうと思います。それともう一つやはり大事だなと思うのは、苦手な子は正直いるんです。小学校で体育をやっていたときも、どんなに頑張ってもなかなかうまくなれない子っていたんです。でも、することは苦手であっても、スポーツを楽しむことはできると思います。やはりスポーツは楽しいんだという思いを実感できる、それは見ることによる楽しみでも私はいいのではないかなと思っていて、オリンピック・パラリンピックというのも一つのいい機会になるかなと思っています。

河野委員：元女子小学生としては非常に胃の痛いテーマに当たっていまして、私もこのデータだけではなくて、自分の過去、神奈川に私はおりましたが、振り返ったときにいくつか思う点もあり、そしてこのようなデータでも思ったんですが、まず意欲と同時に機会・環境というのはすごく重要なのではないかなと思いました。あえて機会ということを考えると、笠原委員がちょうど仰ってくださったような、私は運動は好きなのですが得意ではなくて、先生から指導されるというよりも、外から来た方からコツを教えてもらうと、内緒で教えてもらうと、できるんですよね。その喜びということが意欲に繋がるので、そういう意味では、資料の中で、個々に応じて、運動が苦手な子どもにも指導するということがありました。これはこういうキラキラプロジェクトの一つなんですけれども、こういうものは是非継続をしてもらいたいなというふうに思います。あと、環境という面では、神奈川はやはり場所が少ないというか、少し駆けようとか、ボールを、とか思うと、本当に場所がなくて、これは教育委員会としてというか、学校という校地がありますから、その開放というのはとても重要なのではないかなと思います。今もちろん進んでいるんですけれども、おそらくどんどん進めば進むほど、私も細かい専門的なことはわからないんですけど、メンテナンスが必要だったり、あといろいろ、それをウォッチしている、警備と言っていいかわからないですけれど、人が必要だったりするので、それなりに市民の人達にも楽しんでもらえるような開放の仕方を、少し予算が必要になってしまうかもしれないんですけれど、何かこう、コラボでうまくできればいいんじゃないかなというふうに思いました。最後に、私、この中ではどのくらいの年齢層に入るかわからないんですが、東京オリンピックはちゃんと見ている年でして、ちゃんとではないんですけれど、物心ついてですね、私あれはキャリア教育だと思っているんですよ。あの時見た、見ないという人たちが、例えば将来ロゴづくりの仕事に関わるときに何々とか。スポーツのことだけではなくて、日本でこういうことがあったときに本物を見たということがそれぞれの人たちの心に根づいて、将来設計にも生かされると思うので。よくレガシーって言葉を使っていただいているんですけれど、できれば貧富の差がなく、そして親の忙しさで連れて行けないってこともあるかもしれないけれど、そういう差もなく、小中高できれば、どの子ども達にも、見せてあげる機会を提供できたらありがたいなと思っております。以上です。

吉田委員：笠原委員、河野委員が言ったとおり、我々が普段から話しているとおりのプロジェクトあるいは部活動指導員等々を、このことをやっている、そしてこれを継続していくってことは非常に大事な縁だというふうに思っています。この会議にあたっていろいろ

考えるにあたって、促進する因子以外に邪魔するものが何かあるのかな、というような視点で少し物を考えてみました。そうすると、究極の理屈かもしれないですけど、所詮子どもは、先生の言うこと、親の言うことなんかは聞かないけれど、ただ、先生のやること、親のやることは見ているよ、そのとおりにやるんだよ、というようなことを考えています。例えば、ファミリーレストランに行って、注文して待っている間に何をやっているの、もっと親子で話せばいいじゃない、会話すればいいじゃない、という中で何かタブレット端末でゲームをしている、スマホで何かいじっている。お互いでそんなことをやっている、そういうことなんかが、また邪魔する因子として入ってきているんじゃないか。それは病院の待合室なんかでもやはりそうして見かけるので、これみよがしにそういうことをやらないで話してよとか、中は禁止ですよという話をどんどん声をかけるんですけれど、そういったところがもっと必要になってくるんだ。親のやること、だから、3033 運動でかなり定着しつつあると思います。子ども版の 3033 運動もやはり言うべき。だから学校の教員たちが階段を上るにあたって一緒に子ども達と上っていく、あるいはいろいろなデパート行ってもどこに行ってもエスカレーターやエレベーターを使わないで、一緒に大人たちと上がっていくという姿勢がまず大事じゃないかというふうに思っていることと、やはり得意不得意は子どもの頃は好きか嫌いかがそのとおりになってしまう。子どもの頃にいかに運動・スポーツを好きになってもらうかという点に関して、具志堅先生みたいなオリンピアンなんかも大事でしょうけど、近所の、近くのお兄ちゃんたち、あんなお兄ちゃんみたいになりたいな、ああいうふうになりたいなと思ってもらうように、これは我々が不登校の子ども達にカウンセリングをやるときもまず、そんな難しいことを考えなくたっていいよ、まず懐かせろ、好きになってもらえ、というような形から入るように、そういった人たちにしょっちゅう参加していただいて、それこそ大学生、特別な人じゃなくて大学生のボランティア、あるいはクラブ活動のシーズンオフなんかによく参加してもらって、そして一緒に遊んでもらう。遊んでもらう中に、結構運動する、そういったようなタイミング、きっかけなんかは出てくるのではないか、とそんなふうに感じています。ですから、促進する因子ばかりではなくて、邪魔するものは何かしらって形で、そういったものを少し抑えるような、大人たちの物の考え方の改革というのを同時に行っていく必要があるのかな、そんなふうに思っています。

佐藤委員：事前にこのデータを頂戴いたしまして、全国平均の数値、本県の数値ということで、全国体力・運動能力、運動習慣等調査というのを見させていただきました。１ポイントから３ポイント弱までの、全国平均からの差があるわけなんですけれども、この差がどれぐらい意味があって、どれくらい問題があることなのかということがこの表だけではわからなかったものですから、文部科学省のページから元データを拝見させていただきました。数値のいいところというと、福井、秋田、茨城、広島、大分などの県の名前が挙がっています。神奈川県と同程度のところと言いますと、愛知、大阪。少し山口が低いんですけども、そのようなやはり首都圏、大都市というようなところが低めの数値になっているし、神奈川県は下から数えた方が断然早いといった位置にありました。元データを見ていて面白かったのが、県ごとの差異というのはそれほど明確ではない、例えば東京などは平均を上回っています。どういうふうにこれを読み解いていったらいいのかなって思

って見ていたところ、地域の特性別のクロス集計がありまして、大都市、中核市その他の都市、町村、へき地という分け方で分けていったときに、4ポイント近い差がありまして、それから神奈川県についても、神奈川県の指定都市を除いた部分とそれから、横浜市、川崎市といったデータがあって、これは1ポイント以上離れています。都会になればなるほど子ども達が自然に運動する、スポーツ、体力づくりをする機会・場所というのがないのかなというふうに感じました。住んでいる場所を変えることはできないですから、学校あるいは親御さんがそういう場を提供する必要があるのかなと感じました。ただ、親に任せますと、私が弁護士業務をしておりましても、資力の格差というのは非常に拡大しているなと感じますので、親任せにしてしまうとその親の経済格差がそのまま子どもに、具体的に言うと、水泳教室に通ったり、体操教室に通ったりということができる家庭とできない家庭ということがありますので、公立学校であればその辺が平等に提供できるものでありますから、学校においてそういった機会・場所・指導者を提供していくことが大事なのではないかと感じました。以上でございます。

高橋委員：今日のテーマが、子どもがスポーツに親しめる環境づくりということで、環境の問題なんですね、子どもが育つ。今、佐藤委員からも、都市化が進めば進むほど、子ども達が体を動かす場所が減ってくるってお話があったんですが、私は今日のこの話があるので、文部科学省のデータを見てみたんですね、ホームページを。そうすると昭和39年から子どもの体力の測定のデータがあるのですが、昭和39年、ちょうど東京オリンピックがあった年、1964年ですが、それから、1975年までは上昇だったんですね、小学生中学生とも。1975年でだいたい頭打ちになって、グラフは横ばいで1985年から段々に下降傾向という、そういうふうなデータがあります。いわば台形型ですね。それで、先ほどもお話が出ましたが、私も東京オリンピックの時は高校3年生の時で、本当に熱気に満ちた雰囲気を今でも覚えていますけれど、何か身体を動かさなければ、というような雰囲気が仲間たちにもあったし、社会全体にもあった。だから昭和39年から昭和50年までぐらい、ちょうど高度経済成長があってですね、身体を使って働くとか、遊ぶとかということがあったわけですが、なぜ1985年以降下降なのかというところで、これ、私は子どもの環境のことを調べておりますが、一つは、都市化もありますけど、メディア社会になったこと。それからもう一つは消費社会になったこと。つまり大人も子どもも体を動かさなくても、買い物も仕事も、いわば情報処理で済むようになってきた。その頃から、子どもの遊びが、これはもうくっきりと言えるんですが、それまでは、子ども達は外で身体を使ってみんなで遊んでいたんですけれど、それが、家の中でゲーム機などを使って1人で遊ぶという時代に変わってくるわけですね。これは、よく言われますけど、子ども達は、体格は伸びたけど、身長とか体重は増えたけど、体力はなかなかそれに追いついていかない。むしろ下がってきたということの、大きな理由ではないかと思います。もう一つは、私は戦後の日本の子ども達の写真が好きで、集めているんですけど、ほとんど白黒が多いですが、高度成長前は、子ども達が野性的な顔を、私自身が小学校の頃の写真を見ても、友達を見ても、本当に野性的な顔をしているわけですけれど、それがだんだん、高度成長期以降になると、丸顔で、いわば人工空間の中に入ってきた、あまり日にさらされていない、自然にさらされていない顔になってくるというのを、印象ですけど、あるんですね。これ

は文明の持つ一つの大きな矛盾というか、パラドックスで、機械化や文明化が進めば進むほど、子ども達が保護されていく。保護されてくると、運動能力よりも、身体のしなやかさとか、敏捷性、よく今、小学校なんかで、子ども達が転ぶと、手をつく前に頭からつっこんじゃって、という話を聞くんですけれど、それで実際におでこをすりむいたりするんですが。やはりつまずいたら両手を先につくという、普段自然の中で遊んでいれば習慣的に身につくんですが、いつも部屋の中にいたり、保護されていると、そういう野性的な敏捷性が薄くなってくる。しなやかさが薄くなってくる。私はこれがすごく問題だと思います。もちろん、運動能力はあった方がいいですけれど、それよりも、身体が何か、置き去りになってしまうという、情報とか勉強だけが先へ行ってしまうということは、すごく心配しているところであります。それで、子ども環境という点からいうと、私は自分が所属している「こども環境学会」という学会があって、そこではいつも冒険遊び場をいっぱい作りましょう、つまり、普通の公園ではなくて自然をいっぱい残してですね、子ども達が自分たちでいろいろな遊びをつくれるような、そういう場所をいっぱい作ろうと。これを先ほど教育長に伺ったら、公園などの施設の管轄は市町村だということで、市町村の方でそういうことを是非やってもらいたいんですが、そういう、子ども達が動いたり、歩いたり、走ったりする。なるべく学校の中でもですね、休み時間をいっぱい作って、子ども達が校庭にワーっと出て、そういうような場面ですかね、場所はなかなか難しい、場面をいっぱい作ることによって、何とか子ども達の運動能力を上げていきたいと思っています。以上です。

桐谷教育長：今日のテーマは、行政的に考えれば環境づくりですから、一つは場所、それからもう一つがスポーツをするための用具とか道具、もう一つは、それを教える人、指導者、それをいかに整えていくかと考えていたんですね。場所の点でいうと、たまたま先週、横浜国立大学の教育学部との懇談会がありまして、その話の中で、保土ケ谷にある県立光陵高校の耐震、老朽化対策をやっているんです。そうするとグラウンドやなにかが使い勝手が悪くなって、その時に近くの小中学校や同時に横浜国立大学にグラウンドを貸してもらえないかという形で交渉をして、そうしたら、横浜国立大学としては、陸上競技のトラック等について、貸していただけると。その時に学長さんがおっしゃっていたのは、実は走り幅飛びの助走路については、国際基準のものに整備をしたんですよ、と。ですから、そういうところを使っていただくということがやはりすごくいいですよね、と。つまり、自分たちですべてを用意するのではなくて、場所については、今ある既存のストックを活用すること。実は県立高校でも、143 校中 135 校は開放していますし、大学や企業、これも平成 26 年度で調べたデータがあったんですけれど、大学だと 60 大学中 31 大学、約半分。それから、民間企業も、69 の企業のうち 26 の企業が自分たちが持っているグラウンド等の一般開放をやっているんですね。ただ、それぞれが福利厚生とか学生のためということが本来のものですから、なかなか幅広く貸出のシステムということがうまくできていない。これから大事なのは、今ある場所、大学あるいは高校、あるいは企業あるいは公的な施設、そこの施設をうまく地域で活用していく、そのための仕組みづくりということが、場所という面では必要なのかな、と。特に、大都市部において、新たに土地の整備というのは非常に難しいわけですから、今あるものを活用していく仕組み、この辺は教育委

員会とスポーツ局の連携になってくると思います。場所はそういうことが必要。それからあと、用具・道具というのは、何もすべてを自分たちで持たなくて、いわゆる最初の部分は県が用意して、それを貸し出していくとか、そういったことが必要なんだろうな、と。今回、パラスポーツの普及で、特別支援学校でボッチャの道具ですとか、いろいろと購入をしていますが、それを今度は、特別支援学校を利用していただく団体とか、そういうところにも貸し出していく。そういった相互融通性みたいなものが必要だと。やはり一番課題に思うのは指導者ですよね。学校の先生方は当然できますけれど、体力向上サポーターにしろ、部活動指導員にしろ、外部の方をといっても、なかなかその確保の部分が難しい。これも、それぞれのいろいろな資格を持たれている方がいますので、そういうものをバンク的に整えながら派遣をしていくとか、行政的に見ると、その３つがこれからの課題。もう一つはやはり安全安心ですよね、場所を使う場合は。高校の場合は警備員がいますけれど、特別支援学校はなかなか警備員がいないということで、使い勝手が、利用率が低いとか、そういう点も含めて少し考えていきたいと思っています。以上です。

黒岩知事：この同じテーマで、つい先日県民との対話の広場というのをやったんですけれど、その中で事例発表をやっていただいた中で、ＮＰＯで、現場でこういった取組みをやっていらっしゃる方、いろいろといらっしゃるんですよね。それで幅広く子ども達を集めて、とにかく楽しんでもらおうというところから始まってね。それで、今のコツという話がありましたけど、なるほどなと思ったんだけど、例えば逆上がりができない子にどうやって逆上がりを教えるのか、そういったところの教え方があって、マットに寝転がって、最初に棒を持って、そこから何かやり方があるというか、いきなり逆上がりをやれというとなかなかできなくても、ちょっとした教え方があると、それでできるっていうかね。この場でいろいろな、これまでも、似たテーマで話をしてきた部分があって、その中で、具志堅前委員にも現場に行っていただいて、キラキラプロジェクト、今具体の話がありましたけれど、またちょっとしたコツということによって子どもができるってなると、それは先ほどのデータで明らかに表れているわけですね。できるとなると、その楽しくというか、楽しくなったら自分でまたやりたくなるという、新たな良い循環が巡っていくんだけれど、やはり最初のきっかけのところですよね。自分は苦手だという意識はついちゃうとやらなくなっちゃうというか、やっても楽しくないというか。だから神奈川県全体を見ても、子ども達の、ものすごくアスリート的な能力が高い子たちと、全然やらない子の二極分化が進んでいるのかなという中で、その最初のきっかけづくりというか、そこのところはすごく大事なことなんじゃないのかなと思いますよね。そういうときに、今話を聞いていてもですね、具志堅さんのような人があちこち行ってくれれば、きっかけづくりになるんでしょうけど、そんなたくさんいらっしゃるわけじゃないわけだし。そうすると、まずは教員にそのきっかけづくりができるような能力というのを教えていくということが必要なのかなという気がしますけどいかがでしょうか。

笠原委員：おっしゃるとおりです。この資料にもあるように指導主事に学校に行っていただいている。もちろん、県の指導主事の数は限られていますけれど、それが市町村そして体育センターと、裾野を広げていく。そして、子ども達に接する機会を増やしていく。地道

ではあるんですけども、確実に教えてもらえると、自分自身も安心して、自信を持って子どもに接することができたので、やはり先生方の意識を変えていくことはすごく大事だと思います。

黒岩知事：発表してもらったそのＮＰＯの人は、子ども達に、最初、いろいろなスポーツをやってもらう環境を作るって言っていましたね。何とか教室ということですと、最初から種目を選んじゃうわけですね。水泳教室では水泳だし、サッカー教室はサッカー。そうではなくて、何でもやっちゃう、そういう環境をわざとつくって限定しない、その中で何となく全体のスポーツの中の魅力を感じて、その中で、その先に自分で好きなものを選んでいく。その時面白かったのは、川口さん、昨日、一昨日か、引退を表明された、元日本代表のゴールキーパーのサッカー選手ですけれど、彼も事例発表をしてくれたんですけれど、面白いことを言っていて、小さい時にいろいろなスポーツやっている中で、一番苦手だったのが、サッカーだったそうです。リフティングなんかも全くできなくて、悔しいからとやっているうちに、何かそこにズボッと入ってきたそうです。そんなこともあるんだな、と話を聞きながら、きっかけづくりというのは、すごく多様なんだなということを実感したんです。そういう仕掛けってやはりいろいろな形でやっていかなきゃいけないんでしょうね。こういうのはＮＰＯ、民間に任せるというのもあるだろうし、我々行政としてそういう、きっかけづくりというのをどうやって仕掛けていくか、その辺はどうですかね。

高橋委員：小学生を見ていて、自分の経験からもそうなんですが、運動能力というように、例えば走る速さとかで、記録とか競技性を持つと、それにおいて秀でない子どもは出番がないんですね。だけど、遊び的なものであれば、子ども達は十分好きなんですね。体育が好きという子どもが、おそらく小学校の五、六年生までは、かなり多いんだけど、だんだん差が出てくる。私はスポーツと運動というふうに言うよりも、知事がおっしゃったようにいろいろな競技をやってみる。それで、面白いという、トライアルというか、そういうことがいっぱいできるような場面があれば、小学校の中学年までぐらいと同じように好きになれるんじゃないかなと思うんですね。子ども達が中学生ぐらいになると、だいたい、あいつは野球が上手い、あいつはサッカーが上手いって、だんだん差が出てくると、それはそれで非常に大事なことなんですけれど、運動能力において、なかなか好きになれない子ども達を掬い上げるという点からいうと、記録とか速さとかは後回しにして、とにかくいろいろなことをやってみる、そういうような場所を学校でも用意してくれれば、きっと好きになれるんじゃないかと思います。

笠原委員：県の方で取り組んでいる、小中連携の事業というものがあって、その中で、中学校で部活動をやっている生徒たちが小学校に行って、例えば、体育祭の前に、徒競走のバトンの受け渡しの仕方を教えているという取組みを聞いたことがあるんですけれど、県だけでできるものではなくて、県がやりながらも市町村と協力をして、そして小学校中学校で子ども同士で教えていくということも、先ほど吉田委員がおっしゃったように、近くの憧れを作って、そういうお兄さん、お姉さんになっていきたいというところにも一つき

っかけがあるのかなと。県内でもずいぶん小中で連携した取組みということが広がりつつあるというので、そういうのも巻き込みながら、いろいろな形ができるんじゃないかと思いました。ただ一方で部活動が十分できる状況にない、指導者が十分じゃないというところもあるようではあるんですけども、とはいえ、インストラクター等かなり県では入れていますので、そのあたりを県立高校とまた協力しながら市町村の小中学校が上手く共同でやっていくという、持っている資源を、先ほどの教育長じゃないですけど、みんなで使っていくというところができるとずいぶん違うという気がします。

吉田委員：そのとおりですよね。身近な資源を使うというのは大事な、有り難いことで、具志堅先生があちこちいるわけじゃないですもんね。同じ理屈で僕が思い出すのは、ブンデスリーガに行って、一番最初のサッカーをやった奥寺さんっていらっしゃったじゃないですか。奥寺さんがサッカー教室に来ました。喜んでいるのは親たちだけなんだよね。子ども達にとっては、この人誰、というイメージもないわけじゃない。だからそんなに偉いアスリートを選んでやっていくというふうに、えらく大上段に構える必要はないんだ。近くの、本当にそういった指導員たち、近くの先輩達なんかを使っていろいろやってもらえる。そしてもう一つ、親の協力がそこでは必要。そうやって運動するよりも勉強しなさい、塾行きなさいという価値観を持っている親もいないわけではない。そこで利用するんだったら、サッカーを練習する時、全部英語でやる。野球をやるときに英語を使う、それが日常のトレーニング。だからある意味で野球選手とかサッカー選手の、その得意な人以外にも、英語の得意な人たちなんかを入れて、お互いの意見とかそういった意識交換、意見交換なんかを少し英語でやるという形だと、親たちも是非行ってらっしゃいという気持ちになって、さらに進む、そのようなよくばりなことも考えてもいいんじゃないかな、そんなふうに感じました。

佐藤委員：アメリカでの経験ですけれども、日本ですと、野球教室だとかサッカーとか決まった競技になってしまうんですけども、アメリカの地域スポーツクラブというのは季節によっていろいろなスポーツを子ども達に体験させるので、そういうシステムがあればいいなと思いますが、それも民間に任せると資力の差というものが出てしまいますので、もし学校の施設を活用してできるのであればいいなと思いました。小中学校で基礎体力づくりということが大切だと思いますので、日本には学習指導要領というものがありますから、小中学校でやる体育の中身が、全国どこへ行っても同じだと思うんですけれども、アメリカではそういうものがないものですから、地域の教育委員会のプログラムに任されており、また個々の先生に任されているので、あまりシステマティックなものはなかったと思います。その点では、日本の学校の体育教育のあり方というのは、きちんと現状でも機能しているかなと思います。ただその反面、画一的にすぎる嫌いがあるかな、とも思います。私の２番目の子どもは県立高校に行かせていただいておりますけれども、その子の学校の体育はいろいろメニューを選べるようになっていまして、メニューを見させていただきましたら、居合とかフィットネス、ボクササイズというのもありまして、実は私も私の子どもも球技が苦手なんですが、そういうのがあると楽しめるものが選べていいなと思いました。

黒岩知事：先ほどの学校の活用という中で、教育長からありましたけれど、一般の公立小学校とかいうのも使えるようになっているんですか。

桐谷教育長：公立の小中でも、解放しているところがあります。ただ、一番問題なのは、土日の開放のときに、鍵の貸し借りとか、警備とか、それをどうするかということと、あとは住宅街の真ん中にある学校だと、近隣の方との調整、そういったことが必要になってしまう。むしろ、グラウンドが大きい高校とかの方が使い勝手はいいという話はありますけど。

黒岩知事：対話の広場の中でも、子どもの方から、運動しろとか言ったって、どこですればいいのよって話があって。公園に行ったら、球技やっちゃいけないと書いてあるし、公園で騒ぐなって書いてあるし、学校は、大きなグラウンドがあっても、入ってきちゃいけないと。運動しろって、どこですればいいのかって話があって、学校というのももちろん開放しようじゃないかって話をして。かなり進んできたわけですね。

桐谷教育長：進んできていますね。県立学校がずっと進めてきましたから、そこのところは。

黒岩知事：前の池田小学校事件の後遺症があって、外部から学校の中に人が入ってくるということに対して、すごく恐怖感というものがあったので、閉ざされた学校というのが、どんどん出て来ていたんですよね。それが少しは改善をしてきたということはあるんですね。この間の対話の広場で、大人の人が同じようなことを言っていて、学校を使わせてくれということだったので、地元の皆さんで、順番で自分たちが警備するなどしてくれれば、どんどん開放する方向ですよって言ったんですけどね。自分のことを振り返って考えるときに、小学校時代に何が楽しかったかっていったら、とにかく学校へ行って、休み時間にドッチボールを必死でやるとか、手打ち野球をやるとか、あれが何かめっちゃめちゃ楽しかったですよね。真剣にやっていましたよ。だからもうチャイムが鳴ると同時にバーッと校庭へ出て行って、必死でやっていたという感じはあるんだけど。今の学校の感じはそうじゃないですよね。

桐谷教育長：今キラキラタイムというのを、このキラキラプロジェクトの中に入れて、休み時間は外へとにかく出ようと、それがキラキラタイムだというのを小中学校で市町村教育委員会に呼びかけてきているんですね。でも、なかなか出ない子がいるようです。

黒岩知事：何で出ないの。

桐谷教育長：何ででしょう。

笠原委員：最近の子って、本を読んでいたいとか、特に女の子たちっていうのは、友達とお話をしていたいとか、外に出て身体を使うよりは、何かこう、ささやかな楽しみをしている子が、若干男子児童に比べると、女子の児童に多いかなという気がします。

黒岩知事：僕らが小学校時代というと、まだね、そういう女の子って感じだったかもしれないけど、今の女子は多分そうじゃないんじゃないかという気がするんだけどね。そうでもないですかね。

笠原委員：成長がだいぶ、精神的にも身体的にも小学校に降りてきていますので、高学年の女子になると、中学生ぐらいの精神的肉体的なものを持っている子もいるので、外に行って男子生徒と一緒に遊ぶってことに、抵抗を感じてしまう子も中にはいるようですし、でもやはり本を読みたいとか、お話をしたいとか、手遊びをしたいというような子も実際にはいるので。でも縄跳びだとかドッチボールが決して嫌いだとかというのはなくて、その辺は工夫次第なのかな、と。

黒岩知事：女子の方で、この数字がすごく低いじゃないですか。週３回以上スポーツをするという男子が、平成 29 年度で 52.6%、女子では 34.9%、何でこんなに低いんですかね。これどうすればいいですかね。女子対策っていうのは。

桐谷教育長：同じ調査の中で、質問して子ども達に聞いている調査があるんですよ。その中でいくと、運動やスポーツが好きとか、いわゆる好きと答えている子どもというのは全国平均より超えているんですよね、神奈川県の場合。だから、多分これって、運動をするのが好きだと言いながら、実際の数字としてはこういう結果になってしまう。やはりその機会・環境かな、と。

笠原委員：休み時間が短くなっているというのも、多分あると思います。そうすると、授業が終わってから、ぱっと出て遊んで帰ってくるよりも、ここで話したほうがいいな、という選択をしてしまう子もいると思います。だから、最近では少しずつ長めに取るような工夫も小学校なんかではしているようですけど、全体が決まっている中で、どう休み時間を確保するかということも一つの課題ではあります。

黒岩知事：具体的にどうしたらいいの。

河野委員：小学校に入る前の、幼少期の体験がすごく重要で、その時に何を楽しみとしてきているか、この 10 分で何ができるかとか、そういうことの大切さというのは、家庭とか地域の中で育ってきた上で小学校に入ってくると思うので、ゼロ歳からずっと長い人生設計の中で考えていくってことが大切なのかなと思います。

黒岩知事：本当に不思議でならないよね、女性のトップアスリートの活躍ぶりなんていうのは、昔にくらべてはるかに今はあるじゃないですか。それを見ているわけでしょ。昔ほら「サインがＶ」とかありましたよね。みんな女の子が外へ出て行って、バンバンやったりとかね。それから川口選手も「キャプテン翼」がきっかけだったって言っていましたけどね。ああいうので刺激されて、バッとやるというのはあったんだと思う。今はああいう考えってあんまりないのかな。

高橋委員：昔は、おてんばって言葉がありましたよね。今もあるとは思うけど。それを割合に女性は、自信を持って堂々と言えましたけど、今だんだんそれを言わなくなっちゃったわけですが、それが社会の変化だと思うんですよ。この前同級生と同窓会をやった時に、女の子たちと、昔小学校の頃、馬跳びやったよねって言ったんです。馬になってですね、男女関係なくやっているわけ。それで皆覚えているわけ。平気だったの、僕たちは。今おそらくやってないと思うんだな、小学校高学年のね。その辺やはり、成熟の問題もあるんだけど、それだけ野生的なものが削がれてきたというか、感じるんですよね、文明化によってね。

黒岩知事：子ども達が大人化しているということがあるんですかね。あっという間に時間が過ぎてしまいました。もっと掘り下げていきたいと思いますが、全然結論にもいかないままでありますけど、課題として受け止めざるを得ないな、ということですよね。だからここで議論した中で、先ほど言ったように、学校開放ということも一歩進んできたし、やはりそのキラキラプロジェクトで実際に教育現場に行って、外部からの人がスタッフについて少し教えてみて効果があった。だから、この中で出てきた果実というか、効果が上がっていることはあるので、今日の議論を踏まえ、じゃあ次に何をやれるか、宿題としてこの問題を考えていただいて、何か次の機会に持ってきていただければ、と思います。

議題２　その他

黒岩知事：ありがとうございました。何か他に、今日のこのテーマじゃなくても結構ですけれど、ご発言があればお願いしたいと思います。

佐藤委員：中学校・高校の先生方に少し配慮をお願いしたいことがあって、体育更衣室、プールもそうですけど、更衣室があるんですけど、ＬＧＢＴの子ども達への対応というか、配慮が必要じゃないかな、と考えています。

黒岩知事：そういった問題は、次のテーマの候補として。

桐谷教育長：河野委員から先ほどお話しが少し出た、今度のオリンピックを子ども達に見せるということが心のレガシーになるんじゃないか、ということでいくと、今組織委員会の方が、学校連携観戦プログラムというのを考えておりまして、これは通常のチケット販売ではなくて、高校生までの子ども達に学校単位や何かで観戦させよう、と。オリンピック・パラリンピックで全国 100 万枚という、チケット販売を構想しているんですね。これは、各都道府県にこれから具体の話が来るかと思いますので、ここの部分については、費用負担とかいろいろわからない部分もありますけれども、スポーツ局の方と考えて、また、知事にご相談させていただければと思います。

黒岩知事：はい、わかりました。他によろしいですか。それでは事務局にお返しします。

中谷政策部長：次回の会議は、来年度を予定しておりまして、具体的な日程につきましては改めて調整させていただきますので、よろしくお願いいたします。それでは、以上をもちまして、平成30年度第２回神奈川県総合教育会議を閉会いたします。皆様ありがとうございました。

－－－

会議資料

資料　子どもがスポーツに親しめる環境づくりについて

参考資料　かながわ教育大綱